

重点取組分野	令和 元 年度		総括	重点取組分野	令和 2 年度		総括	重点取組分野	令和 3 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果			具体的取組	自己評価結果			具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①安心して自分の考えを深めたり、表現したりすることができる授業展開を図るとともに、各学年に応じた教科担任制を継続し、指導の統一性をもたせる。②重点研究のテーマ「授業のつながり」を大切にしたりカリキュラム編成を通して、資質能力の育成を目指した地域材を生かす授業のありかたを探る。	①指導の統一性を意識した授業展開を図ることで、児童が自分の考えを深めたり表現したりしようとする姿が見られた。引き続き授業改善を行うことで、より安心感をもたせる必要がある。②地域材を意欲し、育てたい資質能力を身に付けさせるための支援の在り方を研究し、授業改善を行う。	B	生きてはたらく知	①指導の統一性を意識した教科担任制を継続し、より安心して自己表現ができる授業展開を図る。②自分づくりに関する力を育むために、可能な限り地域材を意欲し、育てたい資質能力を身に付けさせるための支援の在り方を研究し、授業改善を行う。	①指導の統一性を意識し、学年に応じた教科担任制を行うことで、児童はより安心して学習することができた。②活動が制限される中で、身近な材を活用した学習が難しかったが、資質能力を児童・保護者共に感じられる授業改善を行うことができた。	B	生きてはたらく知	①指導の統一性を意識した教科担任制を継続し、安心した授業展開を通して、学習の基礎基の定着を図る。②身近な材を活用し、ぐるぐるを意識した授業改善を行いながら、児童自らが身に付いた資質能力を感じ取ることができる支援の在り方を追求する。		
豊かな心	①全教育活動を通して、道徳教育の充実を図る。②1年生から6年生までの体系的に行う「いのちの学習」を通して、自己を見つめる力を伸ばすとともに、よりよい自分になろうとする気持ちを養う。③年間を通して「たてわり活動」を通して、人を思う心や自主性、協調性を養う。	①メンターチームによる校内授業研究会を通して、授業改善に取り組むことができた。②「いのちの学習」では、ゲストティーチャーを招き体験的な学習を通して、いのちの尊さに触れることができた。③たてわり活動のあめや意義については継続的に伝えていく。	B	豊かな心	①教科横断的に道徳教育の充実を図り、生活の中での判断力を養う。②「いのちの学習」を通していのちの尊さにふれ、自他を尊重できる気持ちを養う。③「たてわり活動」では、異学年交流を通して、人を思う心や責任感、協調性を養う。	B	豊かな心	①全教育活動を通して、道徳教育の充実を図り、生活の中での判断力を身に付け、よいことを進んで行えるようにする。②「いのちの学習」を通して、自己を見つめる力を伸ばし、周りの人に感謝できるようにする。③ペア学年交流では、異学年交流を通して、相手を思いやる気持ちをもてるようにする。			
健やかな体	①「毎日げんきカード」を効果的に活用することでよりよい生活習慣で過ごす意識を高め、自分自身の心と体を見つめる機会とする。②体力アップタイムや大縄大会などから運動の多様性に気づき、喜びや楽しさを味わわせるようにする。	①保護者に協力を得ながら、「毎日げんきカード」に取り組むことで、生活習慣を見つめ直すことができた。自分自身を見つめられる機会となるよう振り返りを充実させていく。②体力アップタイムや大縄大会など、休み時間も様々な運動に親しみ、喜びや楽しさを味わわせることができた。	B	健やかな体	①学校でも家庭でもよりよい生活習慣で過ごす大切さを意識できるようにし、保護者と連携して「毎日げんきカード」を活用することで、自分自身の心と体を見つめさせる。②体力アップタイムや大縄大会などから運動の多様性に気づき、喜びや楽しさを味わわせるようにする。	①「毎日げんきカード」や「健康観察票」を活用することで、日々の体調管理をすることができた。こまめな手洗いやマスクの着用など様々な感染症予防対策を行ってきた。自らより健康に生活する意識を育てていく。②感染症予防に取り組みながら、短縄週間など体力維持のための活動に取り組んできた。	B	健やかな体	①学校でも家庭でも心と体の健康を守る大切さを伝えていくために、保護者とも連携し「毎日げんきカード」や「健康観察票」を活用し、自分自身の心と体を見つめさせるようにする。②感染症予防に努めながら、児童が体を動かす喜びや楽しさを味わうことができるための活動を探る。		
児童指導	①「スタンダード」を全職員、保護者で共通理解し、一貫した指導を行う。②研修や会議内で児童理解の場を設け、児童の状況を理解する。③児童を取り巻く諸課題について、担任と特別支援教育コーディネーターが連携し、情報収集、連絡調整を行い校内委員会を計画的に行い、早期解決を目指す。	①「スタンダード」については、内容によっては教職員共通理解を必要とする。②外部の講師も招き、児童理解研修を行うことができた。③課題解決型ケース会議を開き、支援に関するアイデアや計画について話し合うことができた。その経過については児童理解で担任からしっかりと伝えていく。	B	児童指導	①「スタンダード」の全職員・児童・保護者の共通理解を図る。②児童一人一人に寄り添いながら状況を理解する。③児童を取り巻く諸課題について、迅速かつ組織的に対応し、経過等についても児童理解の場において全職員で共通理解する。	①「スタンダード」を保護者と児童と一緒に確認できる機会を設けてもらえよう働きかけが必要がある。②児童支援専任を中心に児童理解研修を行うことができた。③各教職員が迅速に諸課題を共有し、初期対応やその後の経過観察を丁寧に行うことができた。	B	児童指導	①「スタンダード」を保護者と児童と一緒に確認できる機会を設け、全職員・児童・保護者の共通理解を図る。②研修や会議内での児童理解の場を充実させ、児童一人ひとりに寄り添いながら状況を理解する。③関係機関によるコンサルテーションやSSWとの連携を図り、児童を取り巻く諸課題について迅速かつ組織的に対応する。		
特別支援教育	①学習面で特別な支援が必要な児童への、国語と算数の学習における支援をめぐって「特別支援教室」を実施する。②特別支援を必要とする児童の実態把握をYPAアセスメントシートに基づいて個々の指導内容・指導方法を研究し、横浜プログラムなどを活用し、それぞれの子どもの合った指導を行う。	①特別支援教室の内容の周知についてはこれらも個人面談等を活用していく。②校内研修を活かして年に2回YPAを行うことができた。その結果を児童理解に生かすことができた。③横浜プログラムの活用については、継続的に取り組む必要がある。	B	特別支援教育	①「特別支援教室」について教職員で共通理解を図り、手続きや内容等について保護者に周知し、個に応じた支援をめざす。②YPAアセスメントを基にした横浜プログラムに積極的に取り組み、学級経営の基礎を作る。	①特別支援教室の申し込み者が増えた。今後さらに個に応じた支援を進めていく。②年に2回YPAを行い、その結果を児童理解に生かせるように学年で話し合い進めることができた。横浜プログラムについては、学校全体として取り組む期間を2回設けた。さらに推進していく。	B	特別支援教育	①「特別支援教室」については、担任と担当との連携を密にして、より深いものにしていく。②教室環境や授業のユニバーサルデザイン化を進め、すべての児童がわかりやすく、安心できる授業づくりを進めていく。		
地域連携	①様々な地域行事を理解し、参加体制づくりをすることで学校の役割を考え、地域と連携していく。②各学年に応じた学習の中で地域との関わりの中で人々との連携を深める。③三校合同学校運営協議会では、地域とのよりよい意見交換の場としていく。	①積極的に地域行事に参加し連携を深められた。今後も地域とともに行う取組を継続していく。②重点研究を中心に、地域材を活用した学習を進めてきた。児童の中にも地域との関わりへの意識が高まってきている。③様々な意見をいただき、3校の共通理解が図れた。	A	地域連携	①地域行事と学習課程が連携できる学習計画を探りながら、児童に地域所属感をもたせる。②地域コーディネーターを新設し、各学年に応じた学習の中で地域との関わりの中で人々との連携を深める。	①地域行事が少なくなる中、生活科や総合的な学習の単元構成を工夫することを中心に児童が地域に所属感をもてるよう、まちより健康に生活する意識を育てていく。②コロナの影響で地域コーディネーターと関わるのが難しくなった。今後は連携するようしていきたい。	B	地域連携	①地域行事と学習課程が連携できる学習計画を探りながら、児童に地域所属感をもたせる。②地域コーディネーターを活用し、各学年に応じた学習の中で地域との関わりの中で人々との連携を深める。		
幼保小連携	①小学校と保育園、幼稚園の職員の交流を通して、幼児期からの成長過程を意識した教育課程のあり方を共有しながら情報交換をしていく。②1年生や5年生を中心とした交流活動を通して、育成を目指す資質能力のめあてに沿った活動内容を作成していく。	①ほぼ全ての職員が保育園、幼稚園への相互交流を行ったことで、互いの実態を知り、課題や成長過程を意識することが出来た。今後、そのつながりを意識した交流課程をまとめていく必要がある。②交流活動は現状では出来ている。より資質能力の育成を意識した活動内容に近づけていく必要がある。	B	幼保小連携	①幼保小連携推進校の活動を軸として、幼保小のつながりを意識した相互交流を引き続き行う。②資質能力の育成を意識した交流の目的を明確化し、それに沿った計画を基に、交流活動を行う。	①児童の活動は制限されたが、職員間では、できる限りの相互交流を行った。②交流はできなかったが、状況に合わせた計画を基に、資質能力の育成を意識した交流活動を行った。	B	幼保小連携	①幼保小のつながりをより意識できるよう、制約のある中で交流の在り方を探りながら引き続き取り組んでいく。②状況に合わせて計画を基に、個に応じた目標をぐるぐるで明確にしながら交流活動を通して、自己肯定感を高められるようにする。		
自分づくり(キャリア教育)	①学校や家庭・地域の中で自分たちや周りのために働いてくれている人の存在を知る。自分のできることを考えさせる。②たてわり活動・委員会・係の活動を充実させ、自分のできることに気づき役割をもって責任を果たし、進んで取り組む機会をもつようにする。	①周りにいる自分を支えてくれている人の存在に気づかせることはできたが、自分のできることを考えさせることまでは高められていない。②たてわり活動・委員会・係の活動を充実させることができた。児童一人ひとりが役割をもって責任を果たした。さらに進んで取り組む自主性を育てていきたい。	B	自分づくり(キャリア教育)	①キャリアパスポートを作成し、自分のできることを考えさせる。②たてわり活動・委員会・係の活動を充実させ、自分のできることに気づき、自分の役割に責任をもち、自ら進んで取り組む機会をもつようにする。	①生活や学習の中で「ぐるぐる」や「キャリアパスポート」を活用し、児童が自らの課題や成長を意識し考えさせることができた。今後は保護者の目にも触れる機会をもつようにする。②クラブや委員会などの組織編成を工夫したり活動内容を精選したりしてきた。コロナ禍でも自ら進んで取り組む機会をもてるようにした。	B	自分づくり(キャリア教育)	①自分づくりパスポートの内容を精選し、活用の仕方を学校全体で共有することで、児童が自らの成長や課題を意識し考えさせるようにする。②ペア学年での活動・委員会・係の活動を充実させ、自分のできることに気づき、自分の役割に責任をもって、進んで取り組む機会をもつようにする。		
いじめへの対応	①いじめ防止や人権についての校内研修を充実させ、子どもの自己有用感・自己肯定感を高める授業や児童支援を行なうことができるようにする。②子ども一人ひとりがいじめ防止について自分事として考え、行動できるように、「子ども人権宣言」の取組に力を注ぐとともに、日々の指導に努める。	①いじめ防止については委員会を定期的に関き、早期発見や早期対応に努めてきた。初期の対応や、一人ひとりを大切に環境づくりについては更なる改善が必要。②本校の特色の一つである「子ども人権宣言」の取組については、1年間継続して意識をもたせられるよう工夫していく。	B	いじめへの対応	①人権やいじめ防止についての校内研修を充実させ、子どもの自己有用感・自己肯定感を高める授業や児童支援を行なうことができるようにする。②年間の取組として子ども会議を有効活用し、子ども一人ひとりがいじめの問題について自分事として考え、行動できるようにする。	①いじめ防止委員会を定期的かつ必要に応じて開き、児童専任と連携をはかること、いじめの早期発見、早期対応に努めることができた。②代表委員会によるいじめアンケートなど、いじめについて考える機会を設けた。子ども一人ひとりが継続していじめ問題についての意識を高められるよう支援していく。	A	いじめへの対応	①いじめ防止や人権についての校内研修を充実させ、子どもの自己有用感・自己肯定感を高める授業や児童支援を行なうことができるようにする。②YPAアセスメント、いじめアンケート、人権宣言などを活用して、子ども一人ひとりがいじめ防止について自分ごととして考え、行動できるように日々指導に努める。		
人材育成・組織運営(働き方改革)	①全職員が三部会に所属し「一人一役」を担い、働き方改革を念頭において内容の改善を図ることで、学校全体の意識向上につなげる。②重点授業研究と年次研等の授業研究会を連結し、授業力向上のための取組の効率化を図る。③教職員相互の業務交流を活発にし、支援し合い、キャリアアップの姿を共有できるようにする。	①働き方改革の視点で計画を見直しながら学校行事等を推進する教職員の姿が見られた。しかし今だ時間外勤務45時間以上の教員が多く、実質的な多忙解消には至っていない。②授業研究の部分を連結することで効率化が図られた。③メンティやモデルの取組を支える副校長や主幹教諭の支援力があつた。	B	人材育成・組織運営(働き方改革)	①全職員が三部会に所属し「一人一役」を担い、働き方改革を念頭において内容の改善を図ることで、学校全体の働き方の意識向上につなげる。②「資質・能力」ベースの授業を中学校ブロック内で公開し、授業力向上を図る。③教員相互の業務交流を活発にし、支援し合い、キャリアアップの姿を共有できるようにする。	③今年度はモデルリーダー研修を実施し、モデルリーダーの発想力、発言力を高める一助とした。研修以降、モデルリーダーの学校経営への参画意識が活性化された。	B	人材育成・組織運営(働き方改革)	①コロナ後の持続可能な視点から行事等を見直し、再構築することを組織的、共働的に推進できるようにし、個々のキャリアアップにもつなげる。②授業力を向上させるために授業をとまなう研修の機会を一教員一回もつうける。		
ブロック内評価後の気づき	年間に2回実施している小中職員合同研修を通して、小中、小の連携を深めることができた。中田中学校ブロックで育てる、9年間で目指す子どもの姿を明確にして、教育課程全体を通して教科等横断的に育成を目指す「資質・能力」のイメージを共有できたことが成果として挙げられる。また、小中の連携に加えて幼保小連携の研究も始まっており、東中田小学校を中心とした幼児期から中学卒業までのカリキュラムを断片的に把握し、児童の育成に生かすことができるようになっていく。さらに、次年度より導入される自分づくりパスポート(キャリアパスポート)についても、今後共通理解を図っていく。	今年度は新型コロナウイルス拡散防止のため、小中ブロックでの授業研究会は実施できなかったが、特別支援教育の研修など可能な範囲で小中ブロックでの研究や研修を実施した。また、「自分づくり教育」に焦点を当て、小中9年間の学びをつないでいくときに大切な事を研究することができた。今後は、「コミュニケーション(人間関係を形成する力)」や「自分づくりの力」の育成のために各校で取り組んでいくことを授業研究会や研修で情報共有していく。特に相手の意見を認める姿勢や、合意形成、折り合いをつける力などを重視し、様々な人と豊かにかかわることができる児童を育てていきたい。		ブロック内評価後の気づき	日々の学校生活において、子ども達が前向きに且つ充実感のある生活を送っている様子が見られる。地域でも元気に頑張る子ども達の様子を見かけ、安心している。今年度は、コロナ禍の中で、地域での活動や行事を通しての触れ合いがなく、大切な機会が失われた一年だった。しかし、学校では、学習、クラブ活動等を工夫して展開して、子ども達が予想以上に学校生活を楽しんでいる様子が見え、安心した。今後はどのように子ども達に大切な機会や経験を与えられるかを学校と地域で力を合わせ考えていかなければならない。			ブロック内評価後の気づき			
学校関係者評価	授業参観で子どもたちの、元気に挨拶する姿、一生懸命掃除をする姿、授業で互いに意見を話し合う姿が見られた。子どもたちはよく育っていると思う。地域を意識したカリキュラムを展開することはより地域が身近になり、学び合う力を育てられると感じ、有効な手立てだと思ふ。さらなる育ちを期待し、間違ってもいい。トライ＆チャレンジ。たくさん乗り越えて考える楽しみ、チャレンジする気持ち、成功した喜びを味わってほしい。また「自己有用感、相手意識」を育ててほしい。外で出合っても元気な挨拶ができる子どもにしてほしい。		学校関係者評価	コロナ禍の制限がある中、学校行事等の取組の見直しや感染防止に向けた共同作業などに教職員一丸となって取り組むとともに、新教育課程や児童指導、特別支援教育への積極的な挑戦も見られ、人材育成による「チーム力」が育ってきたことを感じることができた。3年目は今年度の取組をばねに働き方や行事等の取組の改善を図っていく。			学校関係者評価				
中期取組目標振り返り	「地域とのつながりの厚さ」を活用し、まちや人と関わりながら自分をつくるための力を育む手立てを整理してきた。東中田小カリキュラム作成はその根幹である。このカリキュラムを作成するなかで教職員が意義を感じ取り、学校教育目標に意識を向け、協働して学校運営に向かうことができたことは大きな成果である。また学校関係者に評価されたことも教職員にとって大きな自信となった。次年度も教職員のカリキュラムマネジメント力を伸ばす研究を行い、「自分づくりに関する力」の育成を中心にすえ、取り組んでいく。そのためには「安心できる学校づくり」に力を注ぎたいと思ふ。		中期取組目標振り返り				中期取組目標振り返り				